



シリーズ「アジアほっつき歩る記」第13回

スリランカ 内戦の後遺症

須賀 努

コラムニスト・アジアウオッチャー

インドの南に浮かぶ、北海道より小さい島、スリランカ。敬虔な仏教国というイメージとは裏腹に、26年にも渡る内戦が終結したのが、わずか4年前の2009年。新たな復興の過程に入っているスリランカを訪ねてみた。

改革開放初期

正直スリランカはアジアの他国が発展している中、大きく遅れていると言わざるを得ない。

最大都市のコロンボで車の渋滞が始まったと言ってもまだかわいいもので、中古の日本車が多く見られる風景は数年前のヤンゴンを思わせる。

コロンボで商売をしている中国人は「ここは内戦が終わったばかり、中国でいえば80年代半ばぐらいだろう」と話し、その例として「中国から物資を輸入しようとしても、税関の検査が厳しく、なかなか物が入らない。中国の改革開放初期の状態だ」と嘆く。実際筆者は「違法に物資を持ち込んだ」との嫌疑で、公安に踏み込まれそうになっている中国商人とコロンボのホテルマネージャーの通訳にかり出され、その状況をつぶさに目撃した。

兎に角外貨が無いのだ。スリランカ政府としては、何とかして外貨を稼ぎ、節約して、国のインフラ整備など、経済発展に役立てるための資金を確保したいと考えていることが良く分かる。勿論一部には賄賂などの汚職もあると思われ、未だに混乱期だが。

外資誘致

現政府は経済を最優先課題として、その発展のた

めなら、多少の犠牲は払う覚悟にも見える。その最たるものが、中国からの急速な経済援助。道路から空港まで主要なインフラを中国に委ねた感がある。

中国にはインド包囲網という地政学的な狙いが明らかであり、インドも対抗上、スリランカへの援助を増やしている。この辺は、周囲の状況をうまく利用して支援を取り込み、かつバランスを維持する政府方針が功を奏しているようで、国民の現政権への支持も広がっている。

これまでずっと経済支援が一番だった日本は、2010年以降中国とインドに抜かれ、3位となった。金額の多寡を議論するつもりはない。キャンディ郊外の田舎道を黙々と直している日本の支援に現地の人々は感謝しているというが、コロンボ-ゴールの海岸線に高速道路を走らせ存在感を見せる中国、支援の仕方を考えるべき時期ではないだろうか。

観光業の課題

スリランカは内戦終了後、外国人の観光誘致、外貨獲得に非常に力を入れている。日本でもBS等テレビの旅番組などで取り上げられることが多くなり、認知度も少しずつ高まって来ている。現在スリランカには文化・自然合わせて8つの世界遺産が存在し、小さな島国としては観光資源が豊富だと言える。筆者も4つの世界遺産を回ってみて、その素晴らしさを堪能した。現在はヨーロッパ人が中心の観光客だが、徐々に日本や中国、アジアの観光客も増えている。

だが、まだまだ整備が必要な所も多い。特に観光



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



写真1 世界遺産 シーギリアロック

地の外国人入場料がこの国の物価水準とはかけ離れた高さであり、例えば絶壁で有名なシーギリアロックの入場料30ドルは、アジアを回っている限りで、これほど高い料金に出会ったことが無い。勿論復興期の事情は理解できるが、リピーター獲得も重要ではないだろうか。また料金を払おうにも、チケット売場が分かりにくく、実際ダンブッラの石窟寺院では、20分も掛けて上まで上ったのに、世界遺産を見ることが出来ないという事態まで発生した。顧客指向が著しく欠如している部分が見られ、改善の余地が大いにある。

観光客向けのお土産も工夫が必要だと感じる。スリランカは世界的な紅茶の産地であり、ヌワラエリアなど主要な産地は観光地として工場にはガイドを配置、見学もさせてくれるが、茶葉の主体はティパック用であり、茶葉が良いだけに、もっと良質でオリジナリティ溢れる紅茶を置いて欲しい。因みにスリランカで一番有名な日本企業はノリタケだが、スリランカ土産としてインド人がこのブランドをかなり購入していくと聞いた。土産物の品揃えが足りていない。

内戦の後遺症

現在のスリランカは問題山積だが、今回の訪問で

一番気になったのが、内戦の後遺症としての人口問題だった。スリランカの75%を占めるシンハラ人の殆どが仏教徒であるが、内戦で若い男性が多く死亡し、女性の結婚相手がいなくなっているというのだ。

実際に筆者が訪れたスリランカの東大とも言われるキャンディにある国立大学、ペラデニア大学は広大なキャンパスを持ち、植物園のような豊かな自然に包まれているが、キャンパスで見かけるのは女子学生ばかり。男子学生は数えるほどしかいなかった。勿論女子の方が優秀ということもあるだろうが、まるで女子大の雰囲気であった。

若い優秀な僧侶とこの件で議論した所、「このままいけばシンハラ人女性は結婚相手に恵まれず、100年後には民族自体が減ってしまうのでは」という危機感を強く持っていた。更には近年中東からイスラム商人が大量に流入し、ショッピングセンターなどの大型投資を行っているが、そこの店員として雇われるシンハラ人女性の中には、イスラム教徒の第2、第3夫人に納まる例も出てきているという。ここでもイスラム勢力の拡大という話が出てきた。

親日国であり、長年の友好国でもあるスリランカ。内戦からの復興に日本も何らかの支援、協力体制が築ければよいのだが、国際情勢は予想以上にこの小さな島にも襲い掛かって来ている。



写真2 スリランカの国立ペラデニア大学